

監督の背中

三ツ橋よしみ

2007年の8月の暑い日だった。私は渋谷の映画館に、山本保博監督作品「陸に上がった軍艦」を観に出かけた。これは新藤兼人がみずから戦争体験を語ったドキュメンタリー映画である。私は中央通路わきに席をとった。あたりを見回すと、ほぼ満員だった。学生らしき客が多かったが、戦争体験者と思われる、年配者の姿もちらほら見受けられた。

映画は、新藤さんが自ら画面に登場し、戦争体験を語るドキュメンタリー部と、軍隊生活を描く再現ドラマ部とが、交互に映し出される構成になっていた。脚本は新藤兼人、監督は新藤兼人の助監督を務めてきた山本保博で、本作が監督デビューということだった。

昭和19年4月、32歳の新藤さんは招集され、広島の呉海兵団に帝国海軍二等水兵として入隊する。与えられた任務は、奈良県の天理教本部で、特攻隊となっていく予科練生が使う宿舍の掃除だった。そこは一年に一回しか使用されない建物で、ノミとほこりだらけだ。召集された100人は一カ月かけて掃除する。年下の上等兵にこき使われ、くずと呼ばれ、木の棒で気の遠くなるほどたたかれた。

掃除が終わると、100人の中からクジで選ばれた60人がフィリピンのマニラに陸戦隊となつて行った。60人はマニラに着く前に、アメリカの潜水艦にやられて亡くなる。残りの40人のうち30人は日本の潜水艦にのってこれも全員なくなってしまう。

残った10人は、宝塚劇場の掃除に配転となった。掃除が終わり、10人の中から4人が選ばれ、日本近海の海防艦に乘せられた。

新藤さんと一緒に召集された100人のうち、宝塚に残ったのは6人だけになった。



自分はどこへ行かされるかと、空を見上げた。青空が広がり、周囲がやけに静かだった。その日の昼に、終戦を知らされる。八月十五日だった。

映画が終わり明るくなった。場内にアナウンスがあった。

「これから新藤兼人監督のトークショーがありますので、座席でそのままお待ちください」

予想外だったが、これはラッキーと、立ち上がりかけた座席に座りなおし、新藤監督を待った。やがて、スクリーン脇のとびらが開き、監督が姿を見せた。若い女の人に脇を支えられている。たぶん孫の新藤風さんだろう。95歳の新藤監督は、背を曲げ、杖にすがりついている。一步一步、通路を進んで来る。スクリーン正面には、三段ほどのステップが用意されていた。そこまでの20mほどが監督には遠い。一步ごとに座席の背もたれに手を伸ばして、体を支えながら進んで来る。監督がやがて私の方に近づいてきた。しみだらけの監督の顔が目の前にあった。監督の手が、私の顔の横に伸びてきて、座席の背をつかむ。鋭い目が、前方を見つめ、強い意志を感じさせた。監督がスクリーンのほうへ向きを変えた。私は思わず、監督の背中に手をあてた。

（お元気で、頑張ってください）と、祈った。

細い縞の入った青い背広だった。背広の下には、骨太でがっちりしたからだがあった。農民のからだ、戦争を生き抜いた身体だった。

監督が無事にステップを登りステージの椅子に腰を下ろすと、皆が拍手をした。監督の顔が笑顔になった。

「62年前の八月十五日も、今日みたいに暑かった」と、監督が話された。

2011年には、99歳の新藤兼人監督が映画「一枚のハガキ」を完成させた。100人いた兵士のうち6人が生き残る。その生き残った男と、夫を戦争で亡くした女の話である。

映画の中で

「なんでうちの人が死んで、お前が生きているんじや！」

夫を亡くした女が、生き残った男をなじる。

新藤兼人は、生き残った自分に、戦争でなくなった96人の遺言を伝える責任を課した。その映画がようやく完成したのだ。戦後66年経っていた。

新藤兼人監督は、2012年5月29日、満百歳で亡くなられ、映画「一枚のハガキ」が遺作となった。

ご冥福をお祈りいたします。